

# ASIA Indicators

定例経済指標レポート

## インドネシア、鈍い設備投資が景気の重石に(Asia Weekly (5/3~5/5))

～個人消費と輸出は堅調さを維持も、企業マインド改善に向けた取り組みが不可欠～発表日:2017年5月8日(月)

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹(03-5221-4522)

### ○経済指標の振り返り

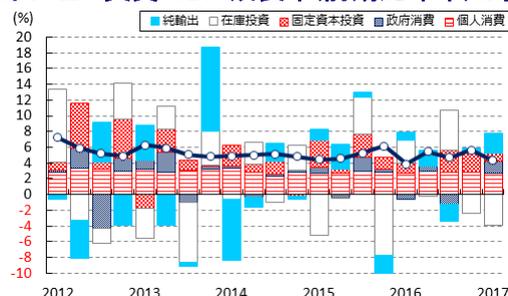
発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
5/5(金)	(台湾)4月消費者物価(前年比)	+0.12%	+0.50%	+0.18%
	(フィリピン)4月消費者物価(前年比)	+3.4%	+3.5%	+3.4%
	(インドネシア)1-3月期実質 GDP(前年比)	+5.01%	+5.10%	+4.94%
	(マレーシア)3月輸出(前年比)	+24.1%	+20.0%	+26.6%
	3月輸入(前年比)	+39.4%	+28.6%	+27.7%
	(香港)3月小売売上高(前年比/数量ベース)	+2.7%	▲1.0%	▲6.1%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

### [インドネシア] ～2四半期ぶりに5%台の成長率を確保も、企業活動の鈍さが景気の足を引っ張る展開～

5日に発表された1-3月期の実質GDP成長率は前年同期比+5.01%となり、前期(同+4.94%)から伸びが加速して、2四半期ぶりに5%台の伸びとなった。ただし、当研究所が試算した季節調整値に基づく前期比年率ベースでは伸びが減速しており、依然として一進一退の景気模様が続いている。物価が比較的落ち着いた推移をみせている上、低金利状態の長期化も追い風に景気のけん引役である個人消費は依然堅調な伸びをみせているほか、世界経済の自律的な回復の動きを反映して輸出は2四半期連続で大幅な伸びをみせており、内・外需が共に経済成長を押し上げる動きがみられる。さらに、年度初めのタイミングゆえに政府消費が拡大基調を強めたことも、景気にとってプラスに作用している。こうした状況にも拘らず固定資本投資の伸びは鈍化しており、特に、企業部門の設備投資意欲の弱さが景気の足を引っ張る展開が続いている。分野別では、農林漁業関連で堅調な動きがみられ、外需底入れの動きは製造業を押し上げたほか、旺盛な個人消費は幅広くサービス業を下支えしている。その一方、年明け以降の国際商品市況の調整の動きが重石となる形で鉱業部門の生産にブレーキが掛かっているほか、未加工鉱石に対する実質的な輸出禁止措置の影響も下押し圧力になっているとみられる。年明け以降、インドネシア政府は未加工鉱石に対する輸出を条件付で解禁する動きをみせているが、この動きはすでに投資を行っている外資系企業などからの反発を招いており、先行きの景気の足を引っ張ることも懸念される。さらに、先月首都ジャカルタで実施された州知事選に関連して、宗教を背景とする対立が先鋭化する動きがみられたことも、企業活動に悪影響を与える可能性もくすぶる。

### 図1 ID 実質 GDP 成長率(前期比年率)の推移

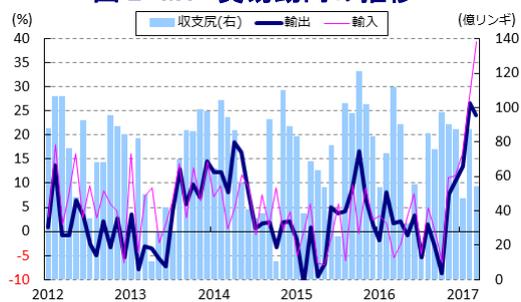


(出所) CEIC より第一生命経済研究所作成、季節調整値は当社試算

## 【マレーシア】 ～世界経済の回復を追い風に輸出は堅調な推移が続き、これに伴い輸入も拡大基調が続く～

5日に発表された3月の輸出額は前年同月比+24.1%となり、前月（同+26.6%）から伸びは鈍化したものの、4ヶ月連続で二桁%の伸びとなるなど拡大基調が続いている。前月比は▲1.0%と前月（同+12.1%）から2ヶ月ぶりに減少に転じているものの、中期的には拡大基調が続いており、世界経済の自律的な回復が輸出の追い風になっている様子がうかがえる。主力の電子部品や電気機器関連のほか、原油や天然ガス、天然ゴム関連などで堅調な動きがみられる一方、国際商品市況の調整などに伴いパーム油関連の輸出額に下押し圧力が掛かった。国・地域別では、中国をはじめとするアジア新興国向けのほか、米国やEU、日本など先進国向けにも堅調さがみられるものの、中東やアフリカ向けなどの頭打ちが足を引っ張った。一方の輸入額は前年同月比+39.4%となり、前月（同+27.7%）から伸びが加速している。前月比も+6.8%と前月（同+11.4%）から3ヶ月連続で拡大基調が続いており、輸出の好調さを背景に素材や部材関連を中心とする中間財のほか、生産拡大に向けて資本財の輸入も拡大している上、雇用底入れの動きなどを反映して消費財の輸入も押し上げられている。結果、貿易収支は+54.08億リンギと前月（+87.32億リンギ）から黒字幅が縮小している。

図2 MY 貿易動向の推移



(出所) CEIC より第一生命経済研究所作成

## 【フィリピン】 ～生活必需品を巡る物価はまちまちだが、徐々にインフレ圧力の裾野は広がりつつある～

5日に発表された4月の消費者物価は前年同月比+3.4%となり、前月（同+3.4%）から横這いであった。前月比も+0.20%と前月（同+0.20%）と同じ上昇ペースに留まっており、食料品価格で上昇圧力が高まる動きがみられる一方、原油相場の調整などを反映してエネルギー価格の上昇ペースは鈍化しており、生活必需品を巡る物価の動きはまちまちの状況にある。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+3.01%と前月（同+2.95%）から伸びが加速しており、前月比も+0.40%と前月（同+0.35%）からわずかに上昇ペースが加速している。消費財価格は全般的に落ち着いた動きをみせているものの、これまでのガソリン価格などの上昇を反映して輸送コストが上昇しており、これが消費財価格などに転嫁される動きがみられるなど、裾野広く物価上昇圧力が高まりつつある。

図3 PH インフレ率の推移



(出所) CEIC より第一生命経済研究所作成

## 【台湾】 ～生活必需品を中心に物価上昇圧力が後退するなか、全般的に物価が上がりにくい展開が続く～

5日に発表された4月の消費者物価は前年同月比+0.12%となり、前月（同+0.18%）から減速した。前月

比も▲0.02%と前月（同▲0.24%）からペースこそ鈍化しているものの、2ヶ月連続で下落しており、物価上昇圧力が後退している様子がうかがえる。果物をはじめとする生鮮品を中心に食料品価格の下落基調が続いていることに加え、原油相場の調整などを反映してエネルギー価格も下落しており、生活必需品を中心に物価が下落したことが影響している。なお、生鮮食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+1.01%と前月（同+0.95%）から加速しており、前月比も上昇に転じている。ただし、これは例年この時期に行われる教育や保健・医療関連などをはじめとする価格改定の動きが影響しており、サービス物価全般では物価上昇圧力が後退しているほか、消費財関連でも物価上昇圧力が高まりにくい展開が続いている。

図4 TW インフレ率の推移



(出所) CEIC より第一生命経済研究所作成

### [香港] ～自動車販売の拡大が小売売上を大きく押し上げるも、全般的な盛り上がりには依然乏しい～

5日に発表された3月の小売売上高（数量ベース）は前年同月比+2.7%となり、前月（同▲6.1%）から20ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じた。前月比も+4.42%と前月（同+4.39%）から2ヶ月連続で拡大しており、長期に亘って低迷が続いてきた小売売上に底入れの動きがみられる。自動車販売が久々に前年を上回る伸びに転じたことで売上全体が大きく押し上げられたことに加え、この動きに伴いエネルギー関連消費が拡大したことも上振れに繋がっている。また、宝飾品などの高額消費にも底打ち感が出ている一方、生活必需品関連の消費は抑制された展開が続いており、全般として盛り上がっている状況には依然乏しい。

図5 HK 小売売上高(数量ベース)の推移



(出所) CEIC より第一生命経済研究所作成

以上